

二次元ぷち文庫

鬼面忍者

三日月

KIMEN NINJA MITSUKI



試し読み版

岩重十郎太
表紙イラスト：はつせん

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『鬼面忍者ミツキ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



鬼面忍者

三日月

KIMEN NINJA MITSUKI

岩重十郎太

表紙／はっせん

登場人物紹介

Characters

ミツキ=アヤナギ

ローラント家に仕える女兵士。王族復権のため任務を遂行する女密偵。

ドレス=ゾンマン

ミツキが狙う指輪を保持する当局の幹部・大佐。快楽的な言動を好む危険人物。

国境に近く位置する集落、最も高く堅牢に造られた三階建ての煉瓦家屋の屋根上で、隠密ミツキアヤナギは、低く保った姿勢のまま姿を消して、それから四周の気配を探った。全身を固めているのは、人造纖維を単灰色に染めたシエルスーツと呼ばれるボディースーツである。全身を影と化した女隠密は、百六十センチ半ばの肢体を腹這いにし、潜伏している。

その姿は屋根上に確かにあるが、存在を余程強固に確信しない限り、視認する事はできない。

しかし、もしも見る事ができたなら、鋭角的にカットされたセミロングの黒髪よりも、手の甲と手首を護るメタルグローブや、膝までを覆うメタルブーツの鈍色よりも、或いは唯一晒された前腕の肌の白さよりも、ただ一点、顔の全てを覆って隠す、鉛色の鬼の面を奪われるだろう。

それはシエルスーツを押し上げて浮き上がる女のスレンダーなシルエットよりもなお、印象的だった。ミツキの暗殺劇に居合わせた目撃者は、暗殺者が女か男であったかさえ思いつき出せずにただ、鬼の仕業と訴える。比較的慎ましい胸の膨らみも、あばらから細腰へ流れ、ヒップへと膨らんでいく媚線も、むっちりと鍛えられた腿足も、全ては鬼の殺気に掻き消され、目撃者の記憶に残る事はないのである。

屋根上、その鬼すら気配ごと掻き消え、静寂のみがある。

今は夕方へ向かいつつある昼下がり、街道の傍に営む四十戸ほどの小さな共同体は、普段ならば小鳥の囀りと水の音だけに彩られているだろう。だがこの日に限っては、右手の街道に沿って二百ほどの集団の動きが感じられた。集落の中にも一個小隊、数十人の兵士が入って来ていて、小銃を肩に走り回る姿が視認できる。彼らは一人の将校を中心とするピラミッド命令系統に従って、各戸に搜索網を張り巡らせようとしていた。

(ゾンマンめ、さすがに早い)

ミツキは右手、集落の入り口を扼して命令を下す。ピラミッドの頂点、ドレスIIゾンマン大佐を視界に収めながら、軽く毒づく。

(何人動かしたところで渡せない)

シェルスーツの内側、薄く特別にあつらえられた背内囊には、隣国で遂に探し当てた一個の指環が入っている。

指環は『対の証』と呼ばれる王族の宝だ。遙か昔、王族の証明として時の王が息子兄弟たちに託したもので、魔力を秘めた二つの指環から成っていた。対の証は末裔たちに受け継がれて王族の基礎を造り、やがては暴王の放逐や愚王の排除、時には権力強奪にも用いられた。そこで現王が権力を独占しようと考えた手を用いて指環の散逸に執心した結果、現在では証を対のまま有する王族は半数に減じたという。

ミツキの名家であるローラント家も、一代前に嵌められて指輪の片方と地位とを失った。

先代はその不幸に氣力を削がれた末、世捨て人の様にして他界していった。跡を継いだ当
代・ロランⅡローラントは日々を放蕩暮らしに費やして、御家が蓄財の全てを散らすのも
そう遠くの事ではないだろうと言われる有様だった。

（その主殿から急にこんな使命を授かるなんて、わたし自身、驚いたけどね）

先日、デカダン息子は二代に渡って仕える子飼いの隠密に、一つ、重大な提案をしたの
だ。王族復帰の為に指環を取り戻せ、と。

音に聞こえる凄腕の隠密などと若くして名を馳せるミツキが、この使命に気持ち奮わ
せたのは当然だった。没落した名家の再興と、放蕩王子の目覚めとは、何れも吉事に違
ない。そして今、技術の粹を集めた二ヶ月間の活動の結晶を、背内囊の中に忍ばせてい
るのである。

眼下、慌ただしく兵士たちの動く様が見える。灰色の軍服を着た一般の兵士とは異なり、
「管理局」と呼ばれる秘密めいた部局に属する彼らは黒の軍服を着用していた。必要の際
にしか動く事のない選抜された精鋭で、ただ指環を闇へ葬る為だけに存在する軍隊だ。

日暮れが近付きつつある事を教える様に、屋根上に潜むミツキの頬を風が撫でていく。
目の前で前髪が揺れ、肩甲骨まで流した後ろ髪がそよいだ。集落では、まるでミツキが此
処にいると確信しているかの様に次々に家が荒らされ、それでも成果の出ない搜索に、兵
士たちは苛立ち、狼藉を極め始めた。

れて、足許から基盤が崩れていく。隠密の尊厳を貶める屈辱と、主家への行き場のない忠誠心が混ざりあい、激しい憤怒と軽蔑とを引き起こし、眼光が自然、強まった。「その視線、いいねえ。ゾクツとくるぜ？　ま、どんなに睨んでも指環に囚われたら最後、ムダだけだな」

鬼面越しの軽蔑の眼差しにうつとりと、青年が言う。

(……指環？)

片言に反応した隠密の顎先を、ゾンマンの太い指先で掴まれた。

「さあ、鬼も感じるのかな？　普通だったら詰まらないからさ、そのときは処分だよ」

ニヤリとした陰惨な笑みが、熱暑の面内、陽炎の様に揺らぐ視界を満たして、不快感を無闇と煽る。

「貴方こそ、今処分して置かなかつたら後悔するんじゃない？」

「キャンキャン喘ぐ煩い牝犬に閉口して、後悔するかもな」

視線が交錯する。攻撃的な気配も交錯して、火花を散らす。

(コイツらの趣向はもう分かっている。わたしが思い通りにならない内は、チャンスがある)

殺されない限り、精神が破綻しない限り、脱出と反撃の機会は得られる筈だ。その為にも二人が掃いて捨てるほどに飽いた性奴隷どもではなしに、頑強で気高い希少な存在であ

り続けなければならぬ。生き延びて反転攻勢に出る為にも、対決ムードを演出し続けるのだ。

「じゃ、御開帳といこうか」

ゾンマンが至近距離で呟いて、隠密の身体を軽く突き放す。二、三步後退ったミツキに見える様に、指をパキッと鳴らす。瞬間、ピリと些細な音がして、人造繊維の何箇所かに切れ目が入った。

「!？」

シエルスーツの裂け目から露に濡れた股間の繁みと、慎ましい膨らみの先端、そして脂じみた汗に塗れた腋窪が露出して、脳が固まる。

光景は無惨だった。

発情して滴った淫汗に湿った黒毛は何本もの塊ごとに尖って、糸を引く白濁汁にデコレートされている。

桜色の乳頭は褐色に黒ズミながら乳輪ごと盛り上がり勃起して、ツンと尖っている。

軟体のアンダーに覆われて行き場を失った上体の汗汁を、ジワジワと滲ませる腋穴はムツとする体臭を放っている。

悉くが牝の本性にさらわれた肉体の象徴に思えて、寒気がした。鬼と畏れられた隠密にしては、肉体の反応が素直過ぎる。

(でも)

それでも構わない。形には拘らない。求めるのは果实を最後に掴む事だ。

「さあ、どうするの？」

淫靡に照る肉体を寧ろ誇示する様に背を反らして、鬼面を男どもに対峙させる。

その威容に二人は陰湿に笑いあい、言葉を交わした。

「フン、さすがだねその態度。それならボクたちが飽きても理性を保つてたら放免してあげよう。どうだい？」

「それいいじゃん？ ミツキ、お前が勝ち残ればその後は俺たちに報復し放題だぜ？」

ニヤニヤとした二つの笑みに、今は感謝してもいい。そんなルールがもしも守られるなら、その射幸心に満ちた笑みは何れ亡失の微笑に墮ちるだろう。

(隠密の理性を、舐めないでよね)

籠った湿気に霞む面内、不敵な表情で見据える。一体、隠密という生命体が何か、知っているのか？ 超人的な戦闘能力と忍耐力を見くびったなら、敗北は必然だ。だが不敵にもゾンマンは、隠密の拘束された腕を無遠慮に掴んできた。

「楽しませてくれよ？」

遠心力で、鬼の身体がベッドへと振られる。下肢がフレームに当たってバランスが崩れ、どさりと背中から、スレンダーな肢体が倒れた。肥満の青年将校が、似合わない優雅な手

つきでバツと軍服を舞い捨てる。瞬間、鬼面越しの視線が三段腹の下、グロテスクに勃ったペニスに吸いつけられた。

伊達に遊んでいる訳ではないのだろう。発達して肥大化した赤黒い亀頭と、見た事がなくらいに大きな黒褐色の茎部とがミツキの脳を圧迫する。奇妙な期待に、肉体が浮き足立つ。モジリと腿が動いて、ロランがクスツと笑った。

(……ツ)

今や肉体は何より雄弁だ。どれだけ唇を引き締め、表情を険しくし、双眸を憎悪に輝かせても、四肢の蠢きは男どもに無用の娯楽を与えてしまう。だからミツキは意識的に強く殺気を漲らせた。

「いいね、その緊張感。最早戦闘力は皆無な筈なのに、背筋が寒いよ」

言葉とは裏腹に舌なめずりしたゾンマンが、腰を揺すってペニスを震わせる。ワザワザ自分の部下を死地に追いやってまで堪能した女の強さと、脆さを、貪婪に楽しんでる。快樂主義者の腐臭が漂って、隠密は眉を顰めた。

「さっさと始めたら？」

挑発にゾンマンが笑んで、ベッドの隠密にのしかかってくる。分厚い肉、脂めいた男臭、ギラつく獣欲が影と共に降りかかって、嫌悪より先に肉体がジワリと痺れる。エッセンスが醜悪であればあるほど、発情した身体が倒錯した悦びに震えて、期待感が増していく。

(ヤバイ、これは)

心奥から警鐘が聞こえる。真上から間近に見下ろされて、肥満体独特の体臭や口臭を浴びせられて、なのにドキドキしてしまいそうな自分に緊張する。太い指が伸びてきて、控えめな膨らみの下端に触れられた。

(……ッ)

軟体のそれとは全く異なる重たい、現実的な感覚が膨らみに広がる。身が振れて、ロラの嘲笑が耳に煩い。

「クク、小さい割に乳輪が大きいんだな」

「どうせ弄り過ぎなんだろう？ こんなに勃起してる様ではね」

ツツ、と円を描かれると膨らみ全体にジワリと甘い感覚が蓄積して、肩から先が痙攣する。小振りな白肌を制する様に褐色に近いくらいに色付いた乳輪が根元から益々盛り上がり、硬くしこった乳頭の位置を押し上げるのが自分自身、分かるのだ。

(身体はもう好きにしているから、殺気だけ絶やすな)

ゾンマンの手が軟体とシエルスーツ越しに腿に触れてきて、ザワザワと下肢全体にも甘さが溜まっていく。

ツーンと痺れて、背筋を粟立つ性感が駆けた。

「こちらでも大したものだね、びしょ濡れじゃあないか」

「オイオイ、ローランド家子飼いの隠密が淫乱ってのは勘弁してくれよな」

瞬間、鬼面越しにゾンマンの両目と視線がかちあった。好機とばかり精神を集中し、鋭く視殺の勢でヤツの双眸を貫くと、ゾンマンは虚を衝かれ、軍人だからこそその敏感さで察した死の予感に目を見開く。

一秒か二秒、時計の針が凍る。それからゾンマンは我に返って架空の死から逃れると、肥満顔をニタリと無理に笑ませた。

「……今のは驚いたぞ？ 本当に殺されたかと思っただくらいだ」

鬼隠密の殺気をマトモに浴びた擬死体験に寧ろ嗜虐心を刺激された大佐の陰惨な表情を見て、内心快哉する。

（さあ、引き込んであげる。ゲームの世界へね）

借りを返そうとする様に、ゾンマンの手に両腿を操られ、股間を開かされる。萎えかけたペニスをもう一度勃起させ見せつけられると、肉体はざわめかされるが、精神までは届かない。飽くまでも殺気を放って、鬼の健在を知らしめるのだ。

「フン、今度はこちらの番だ」

一度は殺意に絡め取られた肥満体を揺り動かして、ゾンマンが言う。ペニスの先端に狙われて、触れられて、ニチリ、粘音を引いた媚肉から甘だるい感覚が腰部一带に波紋を広げる。衝撃に備えて意識を集めると同時、引き摺る様に身体を抱えられて、亀頭が淫裂を

「感じていいんだぞ？　こら、ほら」

「……勝手に、言つてたら？　身体だけなら、幾らでも、貸したげる、から！」

「クフ、貴様の殺気は堪らんね。アトラクションみたいに絶対安全なくせ、スリルがあつて。ホラ、こんなに絡みついてきといて、もつのかい？」

肥満体の動きのままに淫音が弾け、肉と肉のぶつかりが響く。

グチュ、グチ、直線と曲線とを混ぜて、微妙に音を変え、強く身体を貫く快感と、鳥肌の立ちそうなザワめく愉悦とを入れ替えながら、肉体が内側から蕩けていく。

「……ッ、……ッ、……ッ！」

（強いのもヤバイ、けど、う、その、ヤワイのもの、……凄く……！）

ニチニチ、恥骨ごと擦り合わせる様に動かれて、ピリピリと背骨が痺れる。

「そらどうした？　殺せもしないくせに気ばかり張るから、身体の方がどんどんボクのペニスに溺れてるじゃあないか？」

「傍から見つと妬けるくらいだぜ、ミツキ。腰がウネウネ、人間じゃねえみてえに動いてっぞ」

「それは鬼だものな、貴様は。これが本性だものなあ、んん？」

（……ッ、……ッ、……ッ！）

反駁して対決者としての立場を守るべきなのに、下半身全体がドロリと蕩けて、甘くて、

一声発するにもかなりの集中力を要する。ただ絶えず糞どもを射抜く殺気だけを絶やさぬ様に気を張りながら、快楽に慣れようと試みる。

(でも、コイツ、ヤケに丁寧で……!)

深々と貫くかと思えば浅く、ミツキの下に潜らせた両腕も使って角度を変えては肉穴全てを探られる。

「……んッ、……!」

「おや? ココがお好みかな?」

思わず息を呑んでしまつて、すかさず上から笑みが降り落ちてきた。

「……う、」

「おお、ココも」

「……く、……うひ、……んっ、……!」

「クフ、貪欲な事で」

(ああん、……クソ、こんなに鋭敏な筈、ない、のに……!)

又チ又チこそがれる重痒い感覚群に苛立ちを強めながら、せめて毒づいて平衡を求める。身を覆う軟体の蠢きがボディブローの様に効いていた。あらゆる部位から性感が湧いて、ゾンマンの動きだけに集中させてくれない。暖色に染められたものが輪郭を膨張させる様に、淫色に染められた下腹部が膨張した様に感ぜられて、自分のものではない様にさえ思

えてしまう。

「さあ、そろそろ強引なものも欲しいだろうね？」

(……え?)

ギクリ、心音が高まる。見透かされている。下半身に甘だるく溜まった快楽の湖が、出口を求めて波打っているのだ。

「バレバレだよ。動けない筈の両脚が、ボクにやたら絡んでくるし」

(……ウソ)

軟体が強制的に、そうさせたのではないのか？ 重なった肉体の向こう、自分の両脚が見える。何時の間に脱がされたのか、メタルブーツを失って、足首までのシエルスーツと足先を包む黒のアンダーストッキングが露出していた。その爪先を窮屈に窄め、ふくらはぎの筋肉を緊張させ、より深く快楽を貪ろうと肥満体の背中に縋っている様に見えてしまった。

「ホラ、体位変えようね。そしたら強くしていくよ？」

ヤバイ、という単語が何度目か、そして最も鮮明に脳に浮かぶ。抱きかかえられ持ち上げられ、対面座位に移行させられる。ゾンマンが下から突き上げる感じで大きな体躯を揺すった。

「……んあん……ッ！」

肉音が一際高く鳴る。ゴツリと聞こえそうなくらい下腹部の骨格にぶつかってくる衝撃。
「んくッ、んんッ！　くんう！」

波打つ快楽の湖を激しく掻き回されて、声のトーンが上がってしまふ。鬼面越しにも鼻に掛かり始めたのが聞こえていられるだろう。

（……く、こんな強いのに、続けられたら、呆気なく……）

「イクんだらう？」

「……だ、誰が!？」

「クフ、誤魔化せる訳ないだろう？　ホラ、ホラ、ネチャネチャ絡んでキウンキウン締まって、段々切羽詰ってきてるのが伝わってくるよ」

「そうだぜミツキ？　傍から見るとラブラブにしか見えねえぞ」

何時の間にか傍に来ていた旧主の声に苛立たされる。

「……煩い！　が、外野は、……あう！　ん！」

「ハン、頑張るねえ？　でもコイツはどうかな？」

亜麻色の青年が背後から不意に手を伸ばしてくる。その指がいきなり慎ましい二つの膨らみを下から上へ掬う様に食い込んだ。

「ん！　ひ!？」

「おお、ホントに凄えなこの乳輪。触ったらどうなのかな？」

「……………んん、くッ、……………だったら、試して、みたら……………!!」

「……………へえ……………?」

陰惨な気配を浴びて、意識が微かに気圧される。本当は触れられなくなかった。

(だって、そんなとこ触られたら、間違いなく……………ッ)

「殺気が引いたぜ?」

言われると同時に、左右の勃起乳頭がキュッと鋭く摘まれた。

「……………い、……………ッ!!」

掌の土手に膨らみを潰されながら、盛り上がった乳輪から尖った乳頭までしごかれる。途端、火花が脳に散った。痺れに似た神経信号が上体を駆け巡って、支配され、唇が震える。

「んッ! お、ん、……………ど、同時は、ダメえ……………ッ!」

ハメラれながら、しかも二人の異なるリズムで責められると、バラバラにもたらされる快樂信号をどう捌けばよいものか、脳の許容能力を超えていく。快樂の湖が満たされ過ぎて、しかし行き場もなく、タプタプとたゆんでいるのが分かってしまう。イケば楽だろう。だが一旦決壊させてしまったら、立て直せる保証はなかった。

(あは、拙い、なんでこんな……………? 乳首だって、どうしてこんな大きく……………!!)

指環の力。ミツキは青年の言葉を思い出して、そろそろ自分の身体の変質と結びつけ始めていた。

「そう、コレ、おかしい……! ゆ、指環の力、なんででしょう!」

「クク、そうだよ。王家の指環にとっちゃ、牝一匹コマすのなんざワケないのさ」

グリグリと円を描く様に身体を扱われ、粘膜が二チニチ擦れあい、淫穴が形を変えさせられ、快楽が出口を求めて暴れ出す。チカチカと目の前で白光が瞬く。旧主のムカつく言い様に応じるべきなのに、緩んだ殺気を引き締めるのも一苦労だ。

「あー、このマ○コ悪くないよ。なあ、もう少し殺気をくれないか? さつきから物足りないぞ」

「……く、ふう! な、何度だって、こ、殺してやるわよ!」

鬼面越しに睨む。湿気で揺らぐ陽炎に邪魔されながらデブ顔を射抜いてやる。

「おほ、それぞれ。ならばホレ、お返しをくれてやらねばな」

「……んんう! な、そんな、トコ……ッ!!」

醜い顔がいきなり腋窪に吸いついてきて、動揺を誘われる。第一にはそんな場所を吸われる事に。第二には、そんな場所に鋭い電流が起こり、骨に沁みる様な快楽が腕から肩へと突き抜けていった事に。

(な、なんで、そんな、腋なんか……!?)

ブヂュ、ブヂュ、吸いつかれて、吸引されて、ペロペロ舐められて、ゾクゾク神経が痙攣させられてしまう。明らかにそこは性的弱点を形成している。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>